

## 日本ロレンス協会ニューズレター No. 47

2024年9月1日

日本ロレンス協会 会長 石原 浩澄  
副会長 木下 誠

猛暑、大雨、迷走台風など、なかなか厳しかった今年の夏もようやく終わりを迎えようとしています。会員の皆さまにおかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

ここに本年2回目のニューズレターを配信し、去る6月に開催されました今年度の全国大会に関する情報を中心にご報告させていただきます。

今年度で55回を数えます日本ロレンス協会の全国大会は、6月22日(土)、神戸の甲南大学に於いて開催されました。Zoomオンラインにも接続いたしましたが、昨年に続きまして会場に集まって対面での大会を開くことができました。研究発表ならびにシンポジウムをとおして、活発な議論が交わされました。

まずは研究発表です。最初の登壇者である大江公樹氏は、『白孔雀』の絵画的性」と題して、絵画との関係という視点から、長編小説としては第1作目となる『白孔雀』にアプローチされました。『白孔雀』論ではたびたび議論となってきた語りの人称の問題と、遠近法などの絵画的な手法との関係に野心的に切り込む、興味深い発表でした。続いて、近藤康裕氏は「“Men in Love” 再考——初期草稿から *Women in Love* へ」と題した発表で、最終稿 *Women in Love* へと至る初期稿を丁寧にたどりながら、またテキスト中のイメージとの関係にも論及しながら、本小説において男性の男性に対する欲望というテーマがいかに重要であるかについて、周到に跡づけ論じられました。

限られた時間ではありますが、両氏の発表後には興味深い質疑応答が交わされました。どちらの発表も、活字となって再びわれわれに刺激を与えてくれる機会を楽しみにしたいと思います。

短時間の休憩をはさんで、シンポジウムが開催されました。石原が講師兼司会を務めるかたちで、講師に浅井雅志氏、新井英永氏が加わり、「日本における初期のロレンス受容について」というテーマの下で発表、そして質疑応答・意見交換が行われました。ロレンスが日本に紹介されてからすでに1世紀が過ぎた今日、われわれがどのようにロレンスを受容してきたのかについての本格的な議論の呼び水になればとの思惑から構想されたシンポジウムです。浅井氏は、初期批評の中でもロレンスに批判的なもの、逆に肯定的なものを意図的に選択し、日本での受容の一端を示そうとされました。前者が土居光知、斎藤勇で、後者が寺田健比古です。批判者、擁護者それぞれに浅井氏独自の批判や評価を織り交ぜながら展開される議論には、ロレンスそしてその批評家に対する浅井氏の思い入れがにじみ、快活で刺激的なロレンス受容論でした。続く新井氏の関心は、思想家・福田恒存のロレンス受容でし

た。福田のロレンス論をめぐって、彼の戦争に対する考え・姿勢を踏まえる必要性、個人と集団との関係という問題、また近代のとらえ方等について、緻密な考察が展開されました。ロレンス作品の訳書もある福田ですが、その福田とロレンスを正面から論じる研究はそれほど多くないようです。今次の発表を嚆矢として、新井氏による更なる議論の展開を期待させる報告でした。石原の報告では、前二者とは少し視点を変えて、ロレンスの受容者として著名な批評家 F.R. リーヴィスを日本のロレンス研究ならびに英文学研究がどのように受容したかという課題設定としました。リーヴィスのどのような論点を日本のロレンス研究が注目したかに加えて、ロレンス論の文脈ではあまり見られないリーヴィスの側面に着目している英文学者の議論なども紹介しました。

講師それぞれの思い入れも強く、時間をやや超過する場面もありましたが、今後ロレンスの重要性をどのように考えていくべきか、といったフロアからの問題提起もあり、参加者それぞれが、これまでのロレンス論をどのようにとらえ、今後いかに向き合っていくかを考えるひとつの契機にはなったのではないかと考えます。

シンポジウム終了後、プログラムに沿って「総会」を行ないました。その内容に関しては下に報告いたします。総会終了後、会場を甲南大学キャンパス内のカフェ「Pronto」に移し「懇親会」を開催しました。従来の形に戻るのには実に5年ぶりのことです。学会の議論の続きや近況の報告にと、2時間ほどの賑やかな懇親の時間はあっという間に過ぎました。

研究発表やシンポジウムをはじめ、今年度大会の様子については、協会のホームページ「全国大会」→「55 回レポート」をご覧ください。当日の写真入りで報告が掲載されています。

次に、総会での審議および決定事項をご報告いたします。

## 1. 会員名簿の取り扱いについて

これまで毎年紙冊子の形態で配布してまいりました会員名簿の取り扱いについて、個人情報保護、ならびに学会をはじめ各種組織・団体の動向に鑑みまして、紙冊子の配布を停止することを執行部より提案し、了承されました。また、執行部・事務局において引き続き名簿管理を行っていくことについてもご了承いただきました。

## 2. 2025 年度第 56 回大会について、以下のように提案の上、了承されました。

- ・開催校：國學院大學（東京都渋谷区）  
会場校の上石田麗子先生には大変お世話になります。
- ・日程：6 月中旬ころ  
（\*その後の協議で、6 月 21 日（土）・22 日（日）を予定しています。また、

本年度大会同様に、大会に向けた準備状況いかによりましては、1日開催の可能性もあることも確認いただきました。）

- ・オンラインの補助的な活用

会場校とも相談の上、あくまでも補助的に活用することとします。

- ・ワークショップ、シンポジウムなど企画について

他学会との共同シンポジウム企画の可能性も追求する

### 3. 会計担当の交代について

鳥飼真人氏に代わりまして、あらたに井出達郎氏（東北学院大学）にご担当いただくことが承認されました。

（鳥飼先生には6年間にわたってお世話になりました。ありがとうございました。）

### 3. 会計報告

会計の鳥飼真人氏より、2023年度決算報告および2024年度予算案の報告・提案があり、会計監査報告の後、承認されました。

## その他、報告等：

### 1. 評議員の状況について

評議員の状況について報告しました。定数のようなものはありませんが、現在の数が適切かどうか、特に関東地区においては、地区の評議員を中心に検討していくこととなりました。

### 2. 会員数について

庶務の上石田麗子氏より、現在の会員数は86名との報告がありました。

### 3. 研究助成について

- ・大会研究発表のための助成制度

専任職に就いておらず、かつ公的な機関から研究費を受け取っていない会員に対して、本協会大会で研究発表（シンポジウム講師等の担当を含む）をする際の費用の一部を助成するための制度。（<http://dhlsj.jp/dl/josei.pdf>）

- ・和田静雄海外研究発表助成制度

専任職に就いておらず、かつ公的な機関から研究費を受け取っていない若手会員に対して、海外の学会でD・H・ロレンスに関する研究発表を行う際の費用の一部を助成するための制度。（<http://dhlsj.jp/society.html>）

以上、ご報告いたします。

最後になりましたが、今年度の会場校としてお世話になりました岩井 学 先生に、この場を借りてお礼申し上げます。素晴らしいキャンパスで、素晴らしい教室・会場のご準備をいただきました。すてきな懇親会場では、数年ぶりに飲食を共にして交流することができました。本当にありがとうございました。

来年は、久しぶりの東京（國學院）で多くの会員の皆様とお会いできることを楽しみにしております。

\*\*\*\*\*

（付記：次年度大会に向けて）

個人発表にどうぞ積極的にご応募ください。また、来年度以降も含めての討論企画（シンポジウム、ワークショップ等）に関しましても、執行部までアイデアをお寄せください。